

福嶋の御講

福嶋には、珍しい方法だと言われる、仏教の集団がある。

「ある寺の門徒」であるという集団、と「仲良しクラブ」的な信仰集団である。

先に専門家を交えての「根上町史」を作った時に、専門の先生の応援をして貰ったが、

普通はある寺の門徒同志の集団があるのが普通であるが、福嶋の場合、仲良しクラブ的な、御講の集団があるのが、他と違った方法でとても珍しいと言われた。

私の場合は、本覚寺門徒であるが、西勝寺の門徒集団の「御講」にも属している。

従って、本覚寺の参りと、西勝寺のお参りにも参加することになる。

御講には、その集団に対して下付された「御文様」があつて、その御文を読んで、集団的に信仰を深めるのが「御講」と呼ばれる寄り合いの会である。

福嶋に現在確認された「御文」が、公民館に三部ある。

明治七年に、本願寺二十二世の「釈現如」から、加州能美郡福嶋村本山、若講中、宛てのもの。

天保七年「釈達如」から、加州能美郡、福嶋村、本山小寄講中に宛てたもので、これはどのようなわけか、西二口町安受寺所蔵になつてい

る。

その他に壮年団が戦後に貰ったものが一通。その他一通と、福嶋公民館に三通の「お文」が、大切に所蔵されている。

私事であるが、西勝寺の「御文」を、私の家の仏壇に安置してある。

理由は、長い間、講の本締めとして勤めてきたが、「次世代の若いもんが、なにやら分らんので、保管して欲しい」という事で、止むを得ず保管してある。

昔から、「御文」を、信仰のシンボルとして、先祖たちはとても大切にしてきた。また集団で「御文」を本願寺などから下賜されることは、その村なり、在所が一人前に認められることで、現在では考えられないほど光栄な事でもあった。

講の宿を、順番ですることは、当然の「きまり」で、講宿に当たった時などは調度や佛具を揃え、もてなしの食べ物や蓄えるなど、一家挙げでの準備が欠かせられなかった。

「御文」を次の宿に持って行く時には「往来」の真ん中を歩き、道で遇った人は「御文」に手を合わせて拝むのが、当然の礼儀であった時代が長く続いた。

現在は「御文」は「古書展」の売り物になつていと言ふ。

因みに、公民館所蔵の「御文」は明治五年現如上人が、欧州に向かい、翌年七月に帰国した、意味を伝えており、とても貴重なものである。